

# 日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.13

『尾崎喜左雄氏の古墳時代研究と渋川(2)』

今回は、群馬大学教授の尾崎氏が榛名山噴火の軽石層にすっぽり埋もれた古墳を調査した様子を紹介します。

昭和29年に伊熊古墳、同31年に有瀬1号墳、同32年に有瀬2号墳を発掘しました。場所は国道17号を沼田方面に進み、「伊熊」の信号を敷島橋方面へ右折した付近です。古墳は2層以上の厚さの軽石層で直接埋まっていたわけですから、他の地域の古墳のように地上に高まりがあったというわけではありません。発掘することによって初めて古墳の形や大きさが分かったわけです。その代わり、これら3基の古墳は、いずれも造られた当時のまま完全に残っていました。

発掘調査を中心的に進めた群馬大学の学生は、とんでもない古墳との遭遇に、感動、感動の連続でした。3つの古墳は、すべて小型円墳で、横穴式石室を埋葬施設としていました。墳丘の表面は川原石をきれいに積み上げた葺石ふきいしと呼ばれる構造で覆われていました。噴火の時期が6世紀中頃と考えられていますので、古墳が造られたのは、その直前ということが分かりました。やがて、調査の結果が学界に報告されると、全国の考古学者は、初めて目にするすごさにため息をつくばかりでした。ところで、当時の子持村教育委員会が3基の古墳の周辺で地中レーダー探査を実施したところ、周囲にも同様の円墳が累々と連なることが分かりました。

(群馬県立歴史博物館 特別館長 右島 和夫)



発掘調査中の有瀬1号墳  
(写真提供：群馬大学教育学部)